
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 44 号

<目次>

巻頭言	… 1
特集 台湾を教える－授業編	… 3
学会活動報告	… 18

巻 頭 言

日本台湾学会・四半世紀の「感言」
—「大切に扱わなければ失われてしまうもの」—

日本台湾学会理事長 松田康博

理事長として「巻頭言」を書くのは8回目、これが最後です。もう飽きてしまった方もいらっしゃるかもしれませんが、我慢して最後までお読みいただけると嬉しいです。

若林正文先生にお声がけいただき、「日本台湾学会設立趣意書」（1997年10月16日）の発起人に名を連ね、翌年の創立大会を経て、暫定理事会で総務担当を務めてから四半世紀、常任理事、副理事長、理事長として学会運営に携わってきました。当初私は最年少の常任理事でしたので、経験豊かな先生方について行くのが精一杯でした。

今でも大して変わらないのですが、私が院生の時は、「台湾研究では飯が食えない」と言われていました。「台湾」を冠した教職ポジションは今でも日本にほとんどありません。時代をもっとさかのぼれば、台湾研究は「どうやらあるらしい研究領域」という程度の印象でした。上記「趣意書」では、かつて「広い意味での中国研究」、「オランダ史または日本近代史の一部」であった台湾研究が、「これまでの中国研究（China studies）の下位分野ないし事例研究としての一地方研究（たとえば山東省研究）に軽々に同定されず、一定の独自性をもって成立し得る」にもかかわらず、「理論的にも実際的にも組織化不足の状態」にあったと指摘されています。

つまり、日本における台湾研究はこの組織化不足を解消した日本台湾学会の設立と発展と切っても切れない関係にあると言えるのです。

本学会の機能は多岐にわたります。『日本台湾学会報』と『日本台湾学会ニュースレター』の発行と、学術大会の実施は「三点セット」と呼ばれています。設立まもなくホームページ、定例研究会、日本台湾学会賞、台湾関連文献目録、パートナー会員制度などが整備されました。

近年では大会参加時の託児費用補助の柔軟化、台湾文学学会との協定締結、シニア会員制度創設、ホームページのワードプレス化、ロゴの作成、クレジットカードでの会費納入、コロナ禍での学会運営オンライン化、日本台湾学会学術賞・特別賞創設など、完璧ではありませんが、先進的といえる改革を行ってきました。

さらに、ここ数年で国内外のアウトリーチが進み、World Congress of Taiwan Studies(WCTS)やNorth American Taiwan Studies Association (NATSA)でのパネル提供、International Journal of Taiwan Studies (IJTS)への英語翻訳書評論文の提供、Journal of Contemporary East Asia Studies (JCEAS)への英語翻訳論文の提供がなされ、日本台湾教育支援研究者ネットワーク(SNET 台湾)との協力が進展し、多くの会員がオンラインで様々な解説をしています。

これら、全て担当の若手・中堅・ベテランの方々が汗をかいていただいたおかげです。本当にありがとうございます！

四半世紀を振り返って見ると、本学会は台湾研究のプラットフォームとして機能し続けました。若手を含めた様々な研究者が、研究会や学術大会で報告をし、懇親会でいろんな研究者と出会い、『会報』に論文を投稿して研究業績を積んでいます。海外の学会で中国語や英語での報告や論文発表する人も増えました。論文や単著書で受賞をする人もいれば、オンライン解説で多数の閲覧回数を稼ぐ人もいます。日本語ベースの台湾研究のプレゼンスを高める上で、本学会は不可欠の存在となっています。

最大の反省点は、常任理事など役員の重い負担です。彼らにはルーティンの仕事に加え、新規の改革事案や突発事案にも積極的に応えていただいています。選挙で会員の付託を受けているとはいえ、ボランティアにしては大変な労力です。感謝の言葉ありません。私自身もこれまで「『一回休み』ってないのかな？」と思ったことはあり、実際に在外研究時などは何回か負担の軽い業務に回り、なんとか折り合いをつけてきました。これから学会運営に携わる方々は、互いに相談し、いたわり合いながらうまく負担の分散を図り、自身の研究・教育・生活と、学会運営とのバランスをとってほしいと思います。

今、台湾をめぐる情勢はかつてないほどきな臭くなりました。「一定の独自性をもって成立している台湾」が存在するからこそ、台湾研究は存在します。また上記のように、日本における台湾研究の存在は日本台湾学会にかなり依存しています。「一定の独自性をもって成立している台湾」も、台湾研究も、日本台湾学会も、昔から当たり前のよう存在していたものではありません。存在は人々の努力の賜なのです。かつてないほど台湾の存在が可視化された今日、あえてこのことを強調しておきたいと思います。

台湾も、台湾研究も、「大切に扱わなければ失われてしまうもの」なのです。本学会もまた然り。会員の皆さんに、このことを心のどこかに留めておいていただきたいと願い、感謝の気持ちとともに「感言」の筆を擱きたいと思います。

特 集

台湾を教える－授業編

台湾研究を模索していた講義やゼミ

若林正丈（早稲田大学台湾研究所顧問）

私は、1986—2009年の23年間は東京大学教養学部外国語科に、2010—2019年の10年は早稲田政治経済学術院に在籍して、研究・教育活動を行った。

東大では途中「大学院重点化」と称する改組があつて、公式の所属は「大学院総合文化研究科地域文化専攻」となったが、仕事の量的な重心は一二年生に中国語を教えることで、それで「飯碗」を担保して、その余に専門学部にあたる教養学科と大学院の講義・ゼミをも担当するという基本形に変わりにはなかった。

東大教養学科では、各種の名目で台湾地域研究に関するトピックの講義や関連論文・書籍の輪読などをした。当時のことであるから教科書の書物は無いので、講義では自己流の勉強成果を語るしかなかった。まだ日本台湾学会さえできていない頃である。80年代末からは、1992年刊の『台湾 分裂国家と民主化』（東大出版会）の議論を形成することになる枠組（権威主義体制とその移行、エスニシティ論、選挙クライアンティリズム論など）を手探りしながらの講義になった。2000年代の途中からも同様に、2008年刊の『台湾の政治 中華民国台湾化の戦後史』（東大出版会）の枠組（多重族群社会、中華民国台湾化、七二年体制、ナショナリズム政党制など）を作りながらの講義であつた。

大学院でも週一齣の台湾研究のゼミを持った。内容はその時々で私がその成果を吸収したいと思っている研究著作（呉叡人、汪宏倫などの博論もあつた）の輪読と参加院生の研究報告とが主で、ごく稀にゲストを呼んで話をしてもらつたこともある。院ゼミには80年代末から台湾からの留学生も増えていった。時に政治的自由化の進展で台湾での台湾研究への政治的束縛が解かれ、研究機運が高まっていた時期にあたっており、そんな熱気が留学生を通じて駒場のゼミにも流れていたような気がする。牢固とした西欧第一主義がある東京大学のことであるから、他のアジア地域研究の同僚のゼミと並んで、同僚から見れば一種おかしいムードのあるゼミだったかもしれない。90年代に入ってからだと記憶するが、ゼミの院生（顔を出している他大学の院生も含む）を自宅に招いて年一度の忘年会を行うようになり、早稲田に移ってからもしばらく続いた。午後4時くらいから始めて夜10時頃まで、あつという間に過ぎた一年一度の楽しい談笑の時間であつた。

早稲田では、政治経済学部で「現代台湾政治論」と「台湾地域研究論」と自分で名付けた講義（正式のカリキュラム上の名称は忘れた）を半年交代で開講し、また政治学研究科で院ゼミを持った。この他にも全学共通科目という大枠で、早稲田大学台湾研究所がコーディネートする「台湾研究」コースの講義・ゼミも担当した。

上記「現代台湾政治論」の講義は、自分自身で『台湾の政治』という「種本」を作っていたので、まだましであつたが、「台湾地域研究論」は台湾史の戦後初期までの流れを語って「現代台湾政治論」に接続するという形にしたので、問題が生じた。私は1980年代後半以降、同時代台湾政治の動向観察と研究に重点を移していたので、ちょうどこの時期から台湾史研究が爆発的に拡大していくのを横目で見ながらも、この間の研究成果をまともに吸収できてはいなか

った。大学院ゼミ生の研究指導などを通じてわずかに繋がっていただけであった。後になって台湾史研究界の友人から「台湾歴史研究 30 年の逃亡兵」とからかわれた所以である。特に 17-19 世紀の理解が弱かった。開講して 3、4 年でどうもうまくなないと感じた。そこで長期研究休暇の順番がまわって来たのを機に、この間の台湾史研究の重要成果を吸収する「悪性補習」を開始した。研究休暇終了後、もちろんその成果を努めて講義に反映しようとしたのであるが、形を作りつつある時に定年退職の時が来た。その後も新型コロナ肺炎の「巣ごもり」状態の中で「悪性補習」と枠組作りは続けている。

『台湾研究入門』（若林正丈・家永真幸編、東大出版会、2020 年）に対する書評で、川島真会員が「台湾リテラシー」という言葉を使っている（『日本台湾学会報』23、250 頁）。台湾に関する論著を読み解くために必要となる基盤的知識と基礎的理解とを指しているようである。私にとって台湾研究を語る大学の教室は、このような「台湾リテラシー」の提示から出発して、順を追って、それから、さらに、という展開の講義の場になることはなかった。結局は自分の台湾研究を形作するための模索の場であったとの感が強いのである。

「台湾事情」開講に至るまで

垂水千恵（横浜国立大学）

この 3 月で 30 年間勤務した大学を定年退職する。このニュースレターが出るころには楽隠居の身となっているはずである。所属機関の名称は就職時の「留学生センター」から途中で「国際戦略推進機構」に変わったが（台湾で名刺を渡すと、みんな最初はぎょっとした顔をする。心優しい友人だけが、「強そうでいい」と慰めてくれる）、基本的な業務は変わっていない。留学生対象の日本語教育が主たる職務である。

就職した 1992 年 10 月は、まだ（大学には）バブルの名残があり、1983 年に打ち出された、留学生を 10 年間で 10 倍にするという「留学生 10 万人計画」のため、全国の国立大学に留学生センターが続々と設立されていた時期である。新規留学生センター開設のため、10 月 1 日付で一挙に 3 人の新任教員を公募する（もちろん任期なし）、という今では考えられないような「広き」門のおかげで、3 人目はちょっと変わり種でもよからう、ということでは何とか採用されたのだと思う。しかし、そこから台湾文学関連の授業を開講するまでには時間がかかった。

2000 年頃から、留学生受け入れだけではなく、日本人学生の留学派遣業務も留学生センターが担うことになり、その関連でようやく日本人向けの講義が担当できることになった。最初は「日本のコロニアル文学」という（今考えると聊か胡散臭い）科目名で開講し、台湾のみならず、朝鮮・韓国の日本語作家の作品や中島敦などの「外地」を舞台とした作品も取り上げて教えた。それと並行して、他大学での非常勤勤務が始まったり、勤務校でも大学院を担当するようになったり、科目名および内容は徐々に変化していったが、ここ 10 年近くは「台湾事情」という学部生向けの科目を担当している。この授業の特徴は、「日本語・日本文化プログラム」という台湾の大学を対象とした学費徴収型短期留学プログラムで来日した台湾人留学生（約 20 名）と日本人学生が授業を通じて交流する、という点にある。紆余曲折はあったが、新しい形での台湾人留学生受け入れのプログラムを立ち上げ、関連する科目を開講できたことは、その間の台湾をめぐる国際情勢の変化もさることながら、長年同じ所属先で勤務し、古株（古狸？）になったおかげもあったかと思う。

コロナ以前は台湾人留学生に比して日本人受講生が1対8ぐらいで多すぎることが悩みであったが、コロナの影響で3年間台湾人留学生の受け入れがストップし、オンライン授業が続いている間に、日本人受講生が激減。ようやく2022年秋からプログラムが再開したところ、日本人受講生1に対して台湾人学生3と、逆転してしまった。学生比は1対1ぐらいが理想なのだが、時間切れである。ただ、この「台湾事情」という科目自体はもうしばらく開講できそうなので、非常勤という形ではあるが新しい講師を迎えて、より完成形に近づけてほしいと思う。

さて肝心の授業内容についてザクツと言え、映画『海角七号』『KANO』を題材に台湾史を簡単に導入し、戦前に遡って皇民文学を取り上げる。その次には李喬や鄭清文などの戦後台湾文学において批判的に描かれた皇民表象を通じて「親日」台湾言説に疑問を持たせる。その後、侯孝賢作品を通じて二二八事件を含む戦後台湾史と戒厳令解除前後の雰囲気を紹介した後、外省人繋がり白先勇『台北人』へ、さらに『孽子』から台湾同志文学へと繋ぐ。

また魏徳聖にもどって『セデック・バレ』を視聴。霧社事件をめぐる台日表象ということで台湾原住民文学や津島佑子にも触れる。日本人作家の描いた台湾ということで、日影丈吉を取り上げ、最後に現代日本語文学論として李琴峰・温又柔・東山彰良を紹介して終わる、という流れである。シラバスについてはweb公開されているし、それぞれの回における苦労話？については一昨年『ユリイカ』（2021年8月号）に「台湾映画礼讃」というタイトルで披露したので、そちらも併せて読んでいただければありがたい。

講義内容については毎年少しずつアップデートしていたつもりではあったが、如何せん、コロナ感染拡大以降はどうも情報（および意欲）が停滞気味で、やはり選手交代の時期だなあ、と実感している。ただ、それを補ってくれるのが学生によるレポート構想の発表で、思いもかけないテーマや、スルーしていた映画を取り上げる学生がいて、台湾人留学生はもとより、日本人学生の発想力、情報収集能力には学ぶところが多い。待ちに待った定年退職（楽隠居）ではあるが、こうした若い人たちと直に接することができなくなるのはちょっと寂しいかも、と心揺れる今日この頃である。

「教えたり、伝えたり」の40年

胎中千鶴（目白大学）

そろそろリタイアを考えているので、いろいろ振り返りたいお年頃である。思えば「教える仕事」まみれの人生だった。大学時代に塾のバイトで目覚め、教育実習で「天職かも」と勘違い。私立中学・高校の社会科教諭を皮切りに、留学生に日本語を教えたり、短大や専門学校でアジア史を担当したり、専任・非常勤あわせて40年以上教える仕事をしてきた。おかげで見かけも中身もだいぶ「センセイっぽい人」に仕上がってしまった。

センセイだからなんでも知っているんですね、と思われがちだがそうではない。たいていは必死で準備し、いろんなものを頭に詰め込んで本番に臨む。自身の知見をさらっと述べるわけではないので、教員というより役者や記者に近いかもしれない。

こうして経験を重ねるうちに、つまり私は「教える」のではなく「伝える」仕事が好きなのだとは自覚するようになった。聞き手より多少知識がある立場に立ち、共有すべき事項や概念について、いかにわかりやすく伝えられるかを工夫する。それがうまくいって、なるほどやっぱりそうだったんですね、と言われたときの「わかってもらった」感が嬉しくて、この仕事を続けてきたのだと思う。

だから「台湾を教える」ことは、資料を読んで調べて書く研究活動とは別の、私の一連の「伝える仕事」の一つともいえるが、台湾ならではの面白さもある。

例えば、大学1年生の必修科目として台湾史を担当する場合、受講者の心理的ハードルはかなり低い。18歳の学生にも「台湾」は身近で、すでにどこかで出会っている対象だからだ。タピオカや小籠包、修学旅行や家族旅行。彼らが知る観光情報も「親日」のイメージも、確かにとっつきやすい入口ではある。

だが、台湾はシンプルにみえて奥深く複雑だ。日本統治期はそれ以前の歴史とも深くかかわっていること、植民地の50年間は今の「親日」イメージに直結するとは限らないこと、1945年以降にも激動の歴史があること…。授業の回数が進み台湾史の理解が深まるにつれ、当初は「魯肉飯食べたいわん！」などとお気楽コメントを書いていた学生たちのトーンも次第に変わっていく。全15回の講義のうち10回を越えたあたりから、理解力のある学生ほど「（台湾を）どうとらえていいのかわからなくなりました」と言ってくるようになる。対象と向き合い、相手をじっと見つめて心のなかを知ろうとすれば、わからなくて悩むのは当たり前。「やっぱりそうだったんですね」とは別の反応があってこそ、はじめて「台湾を伝えた」と私は実感できる。

ここ数年は、地域の市民講座などで講演する機会も増えた。大学の授業と異なるのは、聴衆の多くが中高年で、戦前の台湾とゆかりのある親族がいたり、高度経済成長期に台湾企業と関わったりというふうに個人的な経験と記憶が豊富なことである。時事問題にも詳しく、「台湾有事」に関心をお持ちの方もいる。その方面の話題をあえて取り上げ「やっぱりね」と満足して帰路についていただいてもよいのだが、こちらとしても「親日」「有事」以外の視点を少しでも示したい。ではたった2時間ほどで私は何を伝えればいいのか。今のところ悪戦苦闘中である。

こうしてあれこれ悩んでいると、恩師戴国輝先生の講義を思い出す。板書もせず90分語り続ける超マイペース型。地名人名書名が次々繰り出され、聞き手はどこに連れて行かれるのかわからない。ぐるぐる台湾史の世界を巡り、チャイムが鳴るころにはシュタツ！ときれいに結論に着地するのがいつものパターンだった。今思えばそれは伝える気などさらさらない、「ついてこい」一本槍の講義である。未熟な学生たちは、それでも必死にメモをとり、90分の旅に随行し、何が語られたのかを理解しようとした。あれがホンモノの「台湾を教える」なのだろうなあ。「伝えるだって？タイナカくん、何やってんだよ」。だから今も、空の上から先生の大きな声が聞こえてくるようである。

当事者意識と省察的意識の往還

三澤真美恵（日本大学）

「教える」とは、どういうことだろう。あらためて考えてみると心許ない。そこで、試みに『大漢和辞典』を繙いてみると、教は「支（軽くたたいて注意する）と孝（ならふ。一説に、學の古字）の合字」、「上から施すのが支で、下からならふのが孝」とある。教が「合字」であることが肝だろう。「教える」には「ならふ」際の当事者意識（下からの意識）と「注意する」際の学知的省察（上からの意識）の両者が、その往還が不可欠なのではないか。言い換えるならば、教の字が示唆する上と下は、年齢や身分による主体の違いというよりは、二つの異なる「意識の位相」なのではないか。

コロナ禍により延期されていた若林正文先生の最終講義が2023年2月25日に行われた。講演題目「『台湾研究序説』の構想」の「序説」の意味について解説しながら、先生は次のように述べられた。自分はこれまで論文を書き上げた学生に対して「So what?」という問いを投げかけてきた。一つのことを徹底して調べたとしても、それがどのような意味を持つかは、その調査だけでは説明できない。だから、終章ではなく序章（序説）こそが、最後に書く（書き直す）ものとなるのだ、と。

ここでの関心に引き付けていえば、「So what?」は一つのことを徹底して調べたと安堵する当事者に対して、より広い文脈を学ばねばならないこと、完成した論文を一步下がって（あるいは一段上がって）省察すべきことを「注意する」ための質問といえる。「教える」というのは、そうした位相の違いを自覚させ、当事者意識と省察的意識の往還を促し、自らも実践することに違いない。

では、いまだ論文を書いたことのない学部学生を相手に「教える」には、当事者意識とそれを省察する意識の違いを知らしめ、両者の往還を促すには、どうすればよいのだろうか。日本で「台湾の歴史」を対象として。

勤務先の大学では「アジアの文化と社会」という科目名の下で台湾史を教えて十数年になる。前期は日本植民地統治期を中心に、後期は中華民国による接收以降を扱っている。経験的に有効と思われるのは、よくある方法だが、できるだけ異なる視点を反映した資料を比較対照することだ。例えば植民地期の嘉南大圳について考える場合、一青窈の美しい歌声が印象的な八田與一のアニメ映画（2008年）予告編、大沢たかお演じる八田與一が脇役として登場する劇映画『KANO』（2014年）予告編、三年輪作を宣伝した当時のプロパガンダ映画『幸福の農民』（1927年）、1990年代の台湾人研究者による肯定的評価などを見たうえで、そうした評価を疑問視する日台の研究成果、当時の農民による水租不納運動の闘争司令書（1930年）、製糖会社に圧迫される農民を描いた楊逵の小説『新聞配達夫』（1934年）、八田與一の銅像切断事件記事（2017年）などを読む。学生はこれらの資料を通じて、それぞれが代表する当事者意識や省察的意識を観察し、日本で「台湾の歴史」を学ぶ自らの位置にも自覚的になっていくように思う。

日本台湾学会第23回学術大会（2021年）の呉密察先生による基調講演「台湾史を教える」の副題は「通説、俗説、誤説への挑戦」だったが、日本で台湾史を教える際にこの点で最も神経を使うテーマのひとつが「慰安婦」問題だろう。台湾に「慰安婦」問題があることを知らない学生が過半を占めるいっぽう、「慰安婦」に関してマスメディアやインターネットに溢れる「通説、俗説、誤説」に触れたことがないという学生はいない、というのが現状だからだ。こうしたなかで、台湾の元「慰安婦」サバイバーを記録した2本のドキュメンタリー映画（1998年、2015年）は、きわめて貴重な資料である。「日本政府のずるいところはね、60年前の歴史をね、隠して、若い人たちに分からせない。だから、若い人たちは全然昔のことを知らないの。歴史を隠して、ずるいよ」。被害者の一人である陳桃さんが流暢な日本語で訴える姿を見て、多くの学生がハッとす。被害当事者の意識がまっすぐに日本の若い人に向けられていることに驚き、呼びかけられた当事者（応答可能な主体）は他ならぬ自分自身だという意識が刺激されるからだろう。

このほか、授業では学期中に2回ほどディスカッションの時間を設けている。事前に設定した問いについてレジュメを提出してもらい、それぞれの視点や意見を交換する。1グループ5～6人で話す行為と聞く行為、それを観察する行為が錯綜する。そこで生まれる当事者意識と省察的意識の往還、ある種の化学反応は、教員が事前に準備した内容からは生まれないダイナミックなものだ。私は机間を歩きながら耳を側立て、彼らの化学反応に「ならふ」のである。

経済発展の「普遍性」と台湾の特殊性

北波道子（関西大学）

大学で経済学部というところに所属している。担当科目名は「アジア太平洋経済論」。大昔には「外国経済論」という科目の1バリエーションだったそうだが、今から20年くらい前に内容に即した科目名称を付けるようという方針転換があり、前任の故石田浩教授がこの名前を考案したと聞いている。「台湾を取り上げられるような名前にしたのヨー」と言われたのを記憶している。私が大学院を修了したばかりのことである。

経済学は社会科学であり、人々の経済活動や現実起こっていることから普遍的な法則を見つけるところから始まる学問である。（と学部の空気から理解している。）したがって、台湾を教えるという場合にも、ある種の「普遍性」に沿って進める必要がある。そこで、経済発展を軸に、春学期はアジアにおける近代化と工業化の始動過程、秋学期は第二次世界大戦後の東西冷戦の最前線から「東アジアの奇跡」を経て、グローバル・バリューチェーンの構築までを経済発展モデルや貿易理論などを紹介しながら話す。そして、その中心に台湾を据えている。

最初にこの講義を担当したのは2007年で、大先輩の老教授に、「アジアNIEsって、もう、台湾はNewでもないやろ」と、からかわれたのを思い出す。それでも、まだそのころは、台湾のパソコンも、鴻海も、ましてやTSMCも今日ほどメジャーではなかった。日本では「下請け」のイメージがあり、「いずれ卒業すべき」OEM・ODMといった業態が、EMSというビジネスモデルに進化して、巨大化し、SHARPを買収するとは誰も想像してはいなかった。TSMCの熊本工場が30年間上がらなかった日本の製造業の賃金に巨大なインパクトをもたらす日が来るとの期待も、もちろんなかった。しかし、台湾の企業や産業の発展路線が日本のそれとは少し異なることに気が付いたのはそのころだった。

台湾にはいろんな「特殊性」を付与することができる。外交関係を持つ国が14カ国しかないのに、IATAのパスポートランキングでは32位（2022年）であるとか。もっと単純にどのような経緯でそんな状況にあるのかとか。日本の植民地だった歴史をどのように受けとめ、自分たちの歴史の中に組み込んでいるのか。中国との関係の実態はどうなっているのかなど。

しかしそれだけではなく、社会科学分野における地域研究の醍醐味の一つとして、普遍性を軸にするために却って気づかされる相違点というものがある。20世紀には多くの研究者も、タイムラグや多少の特性の違いはあれ、日本が描いてきたような軌跡を描いて他のアジアの諸経済も発展すると予測していたように思う。確かに経済発展という現象には、類似点や「普遍性」も多く観察できる。しかし、台湾を深く知ること、それが必ずしも同一の軌道上になかったことが見えてきたりするのである。

台湾に関する授業をしていて、思い込みや勝手な予測でものをみない知恵を受講生と共有できた時には大いにやりがいを感じる。もちろん、教師の真意を即時に理解してくれる学生ばかりではない。とはいえ、講義を聞いて私のゼミに入り、台湾に関する研究をゼミナール大会で発表したり、卒業論文を書いたりする学生もいて、私自身の知見が広がる経験もある。それらは大きな喜びである。この15年の間にも台湾は随分メジャーになった。コロナ禍前には、修学旅行などの訪問経験により、台湾に親近感を持つ学生が増えたとも感じていた。私自身もゼミ旅行や学部の交流プログラムでしばしば学生を引率した。一日も早く、そのような日常が帰ってくることを願ってやまない。

最後に、今回、経済学という「普遍性」を追求する学問を専攻する学部で、「台湾を教える」ことができる、この状況に本当に感謝しなければならないのは私自身であることに改めて気づき直した。石田先生、ありがとうございました。

「台湾」を教えた

長井眸（株式会社アルツトハンス）

私は、広島という地方都市で塾・予備校の講師をしている。この仕事、平成の初め頃からののだが、それ以前には公立の中学校で教員をしていたので教師の仕事はもうかれこれ40年以上になる。塾での教科は世界史。生徒は、高校3年生と高卒生いわゆる浪人生たちである。

その一方で、私が台湾との関わりを持つに至ったのは、2000年(平成12年)。広島市内に社会人も通える大学院ができたこと、その大学院では尊敬する先輩が教授をされていたことなどが私の背中を押した。選んだテーマは「台湾の中学生が学ぶ『台湾史』」。同時に、これがきっかけで台湾学会の一員にもさせていただいた。

当時の台湾では、最初で最後の国民中学国定教科書として『認識臺灣』地理、歴史、公民の3部教科書が現場で使用されており、日本でも話題になっていた。私は、どのような経緯でこの教科書が作成され採用されるに至ったか手探りで現地資料を求め、また実際の中学生の授業参観のためなどの目的で訪台する機会も増えた。台湾の中学生たちは、広島についてよく学習しており、原爆投下の広島から来たというこの見知らぬ参観者に親切に対応してくれた。

さて、「台湾を教える」の本論に戻ろう。

塾の目的は、センター試験(過去)、または共通テスト(現在)でいかに効率よく得点するか、に尽きる。世界史の出題範囲は時間軸でも地域軸でも実に広い。ヤマをかけるなどということはずりできない。受験までの限られた期間(共通テストまでで言えば9ヶ月)は本当に短い。しかも、世界史選択の生徒でも一年間の授業の最初には「台湾は中国の一部でしょ」などと言うものすらいるのが現実である。この短い時間でこのような認識の高校生に、世界史の全ての範囲を教えるのであるから、正直なところ「台湾には台湾独自の歴史がある」として「台湾を教える」時間的余裕などない。わずかに「世界史の中にときどき現れる台湾史」を扱うだけ、である。例を挙げると、

- 1、大航海時代ー17世紀にオランダ人がゼーランディア城を砦として築造した
- 2、明末ー鄭氏がオランダ人を駆逐した
- 3、清代前期ー康熙帝によって鄭氏が滅ぼされ清朝の統治が始まったが、台湾住民は「化外の民」扱いであった
- 4、清代後期ー牡丹社事件をきっかけとして日本が台湾出兵をした
- 5、日清戦争後ー下関条約で台湾は日本に割譲され、これに抵抗する「台湾民主国」が成立したものの、半年もしないうちに瓦解した
- 6、日本植民地時期ー台湾義民の対日武装抗争もあった一方、この時期に(差別もあったが)教育と社会変遷が進展した
- 7、日本の無条件降伏後ー大陸での第二次国共内戦に敗れた国民党が台湾に渡り、1987年まで世界最長の戒厳令を敷き、台湾住民は白色テロに怯えた

8、1972 年――日本と国交断絶など、台湾は国際的に孤立

9、李登輝登場後、民主化が進み、大陸との戦争状態の終結宣言も出された

と、このように世界史の場面場面で台湾関連の事件があるときに「ついで」のように話題を出すだけに終わる。これが高校世界史の悲しい現実なのだ。1 時間でもいい、まとまった時間を使って台湾の歴史を教えることができれば…と毎年思っているが、時間が許さず毎年叶わないまま終わる。

私が台湾学会の皆さんに強くお伝えしたいのは、まさにこのことである。世界史選択の生徒ですら、台湾についてはこの程度を学習するのが精一杯。世界史選択でなかったほとんどの学生は、台湾のことを知らないままで大学生になっている、ということである。

しかし、台湾学会会員である私は諦めない。10 月 10 日が近づけば、台湾で買った青天白日滿地紅旗を授業冒頭で見せて「今年は民国 111 年」と導入に使ったり、「昨日は留日在廣島中華總會で台湾の曲を二胡で演奏して来たんよ」と「雨夜花」にまつわる話をしたり、台湾民主国の藍地黄虎旗を映像にして大きく生徒に見せるなど、彼らの目や耳を刺激して、少しでも自分の生徒が台湾に興味を持ってくれるように努力をしている。

以上、ささやかであるが、日々「台湾を教える(教えたい)」塾講師のつぶやきとして記してみた。

台湾から世界を考える

湊照宏（立教大学）

筆者が勤務する立教大学に、ゲストスピーカーを毎回招請できて、全学部生が履修できるコラボレーション科目を企画できる制度があると知った時、「最初から最後まで台湾を題材とする授業を企画してみたい」と思った。その願望は、本学会員を含む多くの方々のご協力により、2022 年度春学期にコラボレーション科目「台湾から世界を考える」の開講で成就した。その授業内容は以下の通り、歴史・社会・文化・文学・政治・経済と多領域を跨ぐ構成となった。

- 第 1 回 ガイダンス（湊照宏）
- 第 2 回 日本植民地時代の台湾経済（平井健介）
- 第 3 回 台湾ハイテク産業の競争力（川上桃子）
- 第 4 回 台湾の対外関係：中国と米国（松田康博）
- 第 5 回 兩岸関係と金門島（川島真）
- 第 6 回 日台関係を動かす要因：コロナ危機による変化と今後の展望（福田円）
- 第 7 回 台湾の文学と言語（赤松美和子）
- 第 8 回 民主化と台湾映画（三澤真美恵）
- 第 9 回 台湾における葬墓制の変化（植野弘子）
- 第 10 回 宗教からみた台湾社会（三尾裕子）
- 第 11 回 台湾の教育と社会（山崎直也）
- 第 12 回 多文化主義と台湾の先住民族（松岡格）
- 第 13 回 帝国日本の台湾統治政策（鈴木哲造）

第14回 中台関係の行方：転換期を迎えた1972年体制（黄偉修）

メディアにおいて台湾に関する報道（米中覇権争いの狭間に位置する台湾半導体産業、新型コロナウイルス感染症対策など）が増加していた時期だったからか、履修者は303名と多数になった。その内訳は、文学部58名、経済学部53名、理学部21名、社会学部63名、法学部45名、観光学部4名、コミュニティ福祉学部2名、経営学部29名、現代心理学部5名、異文化コミュニケーション学部20名、セカンドステージ大学（50歳以上）3名であった。本科目はたまた「学生による授業評価アンケート」実施対象科目となったため、その集計結果から履修者より概ね良好な評価を得ていたことが確認できる。所属学部が多岐にわたる多数の履修者に対して、分かり易い授業を展開していただいた各登壇者に改めて感謝したい。他科目のアンケートではほぼ空白となる自由記述欄に、多くの本科履修者がコメントを入力していた。「台湾のみを題材にしつつも、様々な視点から学ぶことができて飽きなかった」という趣旨のコメントが複数あったことが印象的であった。考察対象は一つであっても、その一つの対象に対して毎回異なる視点から考察し続けたことが、履修者に対して知的な刺激を累積的に与えたのかもしれない。

また、履修者からの評価が良好であった原因は、以下の点にも求められよう。それは、登壇者の多くが授業内容に、①履修者が関心を持ちそうな話題の提示、②その話題と学術的な理論やモデルとの関係の説明、③学術的な理論やモデルを台湾の事例で紹介、という3要素を組み込んでいたことである。各登壇者による話の展開は①→②→③の場合もあったし、その逆③→②→①の場合もあったし、それ以外の場合もあった。いずれにせよ、この3要素で構成されたストーリー展開に、多くの履修者が引き込まれていく様子を現場で感じた。

こうした各登壇者のスキルを毎回目で研修することができた筆者は役得であった。2023年度春学期も「台湾から世界を考える」は開講される。2年連続の登壇者もいらっしゃるれば、新規に招請するゲストスピーカーも加わる。2023年度も各登壇者の講義スキルを吸収し、筆者自身が担当する科目のスキルアップにつなげたい。

滲み出る「癒し」の効果

五十嵐隆幸（防衛大学校）

台湾から日本に戻ってくると、何かとせわしなさを感じませんか？

入国審査を終えて電車に乗っても、スーツケースだらけの車内ではまだ旅気分。ところが、乗換駅で電車から降りると、人の流れの速さに飲み込まれて一気に現実に戻ってしまう…台湾と日本では時間の流れる速さが違うかもしれない。台湾研究に携わる我々は当たり前のように台湾に足を運ぶのだが、なぜ台湾は人気の海外旅行先ランキングで常に上位に入るほど多くの人を魅了するのか。人々は台湾に何を求め、台湾で何を感じ、そして再び台湾を訪れたいという気持ちを抱くのであろうか。

2020年春以来、世界は新型コロナウイルス感染症の猛威に覆われ、思うように海外へ渡航できない時期が続いていた。学校教育でも様々なりモート方式が模索され、ハイブリッド方式などが板についた頃、中部地方の先生から夏期集中講義のお誘いをいただいた。政治史を専門とし、非常勤講師の経験もない私が「国際文化特講」と称する科目を教えてもいいのだろうか…と、不安

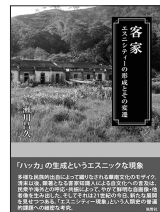
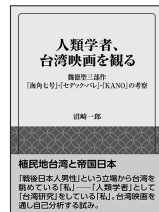
を抱きつつ引き受けさせていただいた。悩みに悩み、テーマを「台湾について学び、台湾を通じて国際理解を深める」と設定し、講義の準備を始めた。

夏も終わりに近づく頃、東海道新幹線に乗り込み、2年半ぶりに首都圏を飛び出した。5日間の集中講義は、最初に台湾を概観したのち、4日間で先史時代から最近の台湾海峡情勢まで政治史を軸に文化的側面を組み込みながら講義を進めた。ここで重要なのが最初の「台湾概観」である。修学旅行先ランキング第1位に輝く台湾だが、主な受講者である1年生と2年生はコロナ禍の影響で、台湾に限らず海外を訪れる機会に恵まれていない。「食べ物が美味しい」「親切」「親日」などのイメージが先行する台湾をどのように教えようか、まず、「台湾という国はあるのか？」と難しい問いを示したのち、文化的側面から切り込んでいった。多くの人が台湾に抱くイメージは、言語や料理に代表される中国文化であろう。いやいや日本語も通じるし、昔の日本のような建物が目に入ってくる。郊外に足を伸ばすと沖縄で見たようなお墓、南部に足を伸ばすと南国リゾートの光景が、欧州様式の赤い建物や米国的な習慣も見え隠れする。こうしたクレオール的な文化が台湾の魅力では？と提起したうえで、様々な文化の融合は、台湾の人々が好き好んで取り込んでき結果ではなく、台湾に限らず文化はたいてい政治的な力に付随して到来し、広まり、根付いていくものだ指摘し、不思議な隣国「台湾」の複雑な政治的变化を主軸に学んでいくことの意義を強調した。

また、毎日リアクションペーパーの提出を求め、夜のうちに質問への回答を準備し、翌日の講義の冒頭でリプライすることを試みた。文化的な質問もあれば、政治に関する極めて鋭い質問もあり、受講生の台湾に対する関心の高さを感じた。そして最終日は2.5コマを受講生による課題発表に充て、その命題は「台湾に関すれば何でもよい」とした。これが予想以上に素晴らしく、コロナが明けたら台湾に行こう！といった旅行計画や、台湾のマーケティング調査に基づく起業構想など、夢と希望に満ちた若者たちの発表を聞き、「台湾について学び、台湾を通じて国際理解を深める」という目標を達成できたと手応えを感じている。

さて、ここまで紹介したことについては、多くの先生方も同じような取り組みをされていることであろう。実はこの授業の最後で、特集記事でぜひ紹介したいことがあった。最後のリアクションペーパーで、ある受講生から今まで教育に携わってきたなかで最も心を打たれる感想をいただいた。簡単に紹介すると、「私は高校時代に挫折し、将来への希望が持てずに過ごしていました。今回の授業を受け、世界に一步踏み出してみようという気持ちが芽生えました」と。かつて私も大きな挫折を感じた時、台湾で心が癒された。実務者時代の友人も、台湾で傷ついた心が癒されたと言う。まさか台湾を訪ねた経験がない若者に「台湾を教える」ことを通じ、将来への希望を持たせることができるとは思ってもいなかった。これは私の「教え方」云々ではなく、台湾の持つ「癒し」の効果が、私の言葉の節々から滲み出していたのかもしれない。

松田康博会員が第11期理事長就任にあたり、「台湾は『宝島』と呼ばれ、（中略）台湾を対象とすることで広がりをもった研究ができる」と台湾研究の魅力を説明されている。この夏期集中講義の課題発表で、受講生が「ダイヤモンドは見る角度によって異なる美しさがある。台湾はダイヤモンドのようだ」と表現した。様々な苦難を乗り越えてきた台湾には、研究者のみならず誰をも惹きつけるような光り輝く魅力があるのであろう。



ブックレット好評既刊

植民地台湾を語るということ
胎中千鶴 著
戦後「台湾農業の恩人」「日本精神の体现者」として敬愛される日本人技師の数奇な生涯、顕彰の経緯と背景から日台双方の語りの理由を考える。追補改訂版。
七七〇円

人類学者、台湾映画を観る
魏徳聖三部作『海角七号』『セデック・バレ』『KANO』の考察
沼崎一郎 著
映画にこめられた複雑な歴史の位相や民族のアイヤを、戦後生まれの日本人男性という立脚点を定めて、さまざまな角度から読み解く。八八〇円

日本統治下の教科書と台湾の子どもたち
陳虹彩 著
植民地教育は、「言葉」からの同化がその中心であった。国語教科書を丹念に読み解き、政策の意図やその変遷、当時の人々の暮らしまで分析。八八〇円

台湾原住民族研究の足跡
近代日本人類学史の側面
笠原政治 著
先駆者・伊能嘉矩、踏査の鬼・森丑之助、人類学の巨人・馬淵東一らが繋いだ研究の松明、それは日本人類学の骨格にも至る、濃密な現地／人との交流でもあった。研究史の総括・初学者への入門書。
三九六〇円

客家
エスニシティの形成とその変遷
瀨川昌久 著
清末以後、顕著となる客家知識人による自文化への言及は、民衆や海外との呼応、共振によって、やがて鮮明な自画像・他者像を生み出した。「エスニシティ現象」という人類史の普遍的課題への細密な考究。
三九六〇円

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
TEL 03-3828-9249 (価格はすべて税込)

風響社

本学会の会員向け【特価販売サイト】
(出版相談も受け付けます)



工学部で教える「台湾の日本語文学」のこと

和泉司 (豊橋技術科学大学)

私の勤務先は豊橋技術科学大学といって、主に高等専門学校(高専)の卒業生を受け入れるために設置された、国内でもちょっと特殊な位置づけの工学部単科大学である。新入生の8割が高専卒業生で、3年生から入学する。日本にある高専のほとんどは工業系で、人文学や社会科学を専門に学ぶ学生はいない。

この学校で、私は教養系科目の「国文学」の授業で「台湾の日本語文学」について教えている。教養系科目なので、ゼミ形式の演習ではなく、基本的に座学で、私の講義を学生が聴く形になる。

私自身の経験でもあるが、自分の専門とは直接関係ない教養系科目を履修するのは、多くの場合進級するための単位取得が目的だ。そのため、学生たちは時間割の都合や授業負担の軽重を考えて履修科目を選ぶ。もちろん授業内容から興味をもって履修する学生もいるだろうが、それは少数派だろう。

積極的に学ぶ理由や動機がない科目を履修している学生。これは文科系学部にもたくさんいるはずだ。しかし工学部の場合は、仮に授業を通じて文学や台湾に興味・関心を持ったとしても、進級後の専門科目の学習にその知識を活かす機会はほとんどない。そういう学生たちに、どうすれば単位取得以外の授業の意義を示すことができるだろうか。そういう気持ちで、毎学期授業の内容を考えている。

もしかしたら、学生はオーソドックスに夏目漱石とか芥川龍之介とか三島由紀夫とか村上春樹とかの話を知りたいかもしれない。そして「教養」としての「日本文学」知識量を増やしたいと思っているかもしれない。そもそもなんで「国文学」なのに「台湾」なんだ、「日本語文学」なんだ、と思っているかもしれない。専門ではなく教養としての科目なんだから、奇をてらわないで「日本文学」と真ん中の内容をやるべきだ、と思っているかもしれない。

しかし、世の中には研究者でなくても漱石や芥川や三島や村上春樹を読み込んでいくだけでも語れるという人たちがたくさんいる。半期15コマの授業で漱石や芥川や三島や村上春樹をなぞっても、知識量や読書量の競争になったら価値は見いだせない。限られた授業時間で、その程度の「なぞる」ぐらいまでの内容しかできないならば、読んでいる人、知っている人が少ないテキストの話を知っていた方が面白いんじゃないか。「国文学」「日本文学」ではなくて「日本語文学」と読んでみたときに発生する一時の「違和感」を自分の言葉で説明できたら、今後の学生たちの生活にも活かせるんじゃないか。

現に私の授業の教室には、視覚的に海外出身だとわかる留学生が複数いる。見た目ではわからないけれど日本や日本人に自分のアイデンティティを置かない学生だっているかもしれない。卒業後に働く会社や地域社会にも、日本人ではないけれど日本語を使う人・使わざるを得ない人たちが常にいるだろう。

その時、「日本文学」ではなくて「日本語文学」として考えてみるという話や、植民地とされた台湾で日本語を強制された人たちが日本語で作家になろうとした話を思い出せたらどうだろうか。「日本」とか「日本人」ということを当然の前提として物事を考えてしまうより、もめ事やストレスを減らすことが出来るんじゃないか。

というように、私は自分の研究テーマを過大評価して、効果を誇張して、学生が聞いたこともない作家の、学生にはとても読みにくい旧字旧かな影印版のテキストを読ませることを正当化している。学問に役に立つ・役に立たないで評価するのは間違っている。しかし私は授業中にしばしば口にはしている。

「「台湾の日本語文学」について考えることは、将来のみなさんの生活にもきっと役に立ちます。」

法学の授業と台湾

根岸忠（高知県立大学）

本学会ではかなり少数派であろう法学を専攻する筆者に、編集部からは授業で台湾をどう取り上げているのか書いてほしいとの依頼があった。正直に言えば、どう書けばいいのか悩んだ。多くの会員がそうかもしれないが、「台湾」、「アジア」や「東アジア」を冠する授業のいずれも行ったことがなかったからである。

近時変わりつつあるが、明治維新以来、アメリカやヨーロッパ（といいながら、実質的にはアメリカ、イギリス、フランス及びドイツの4か国）の法制度を研究することが法学ではまだ主流であり、また、（最近講座を置く大学が増えてきた）「アジア法」の講義や台湾法に関する授業も受けたことはない（ただし、大学院の指導教授は日本統治時代の台湾生まれであった。後からその話を聞き、驚いたことを覚えている）。

筆者は、文化学部（もともとは文学部であったが、着任前に改組されている。言語、文学、歴史、地域、観光及び法学等を学べる学際的な学部である）で労働基準法等の労働関係に関する法分野である「労働法」、医療保険や介護保険といった社会保障に関する法領域である「社会保障法」、主に民法の「親族」及び「相続」に関する「家族法」といった講義を担当している。基本的には日本の法制度について話すのだが、いずれの授業でも台湾には必ず触れている。新型コロナウイルス感染症蔓延前には年に3、4回渡台し、それにくわえて、平成29年から30年まで國立政治大學法學院にて在外研究を行ったのだが、そこでは台湾人はもちろんのこと、現地採用、駐在員や留学生等のさまざまな日本人と知り合った。

「労働法」では、労働条件が合わないと思ったら1日で辞める、閉店時間前にもかかわらず、客がいない場合には勝手に店を閉める、また、基本的には残業したがいらないといったような、現地で筆者が見聞きした台湾人の働き方を話している。こうした台湾人の働き方は、すこしずつ変わっているとはいえ、残業がいまだ当たり前だとする日本人の働き方に再考を迫るものだといえよう。

また、「社会保障法」では、台湾においては日本以上に少子化が進んでいることから、蔡英文政権が年金改革を行った結果、激しい抗議活動が展開されたこと、介護については、家族が担うとの建前であるが、実際にはインドネシア人を中心とする外国人労働者が家庭で行っていることにも言及する。筆者は台北市内での移動に際して、捷運では乗り換えがめんどうなのでバスを多く使うが、バスは急発進・急停車であるため、高齢者にとってきわめて危険であり、車内で車いすに乗った障害者を見かけることはないといった話をする。さらに、道がデコボコであることも多いため、バリアフリーについては疑問符がつく。

「家族法」の授業では、婚姻の話をする際に、アジアで初めて同性婚が法認されたこと、くわえて、三世代同居がなぜいまだ多いのか、扶養義務と家族のあり方について話している（以上の台湾の話について、怒る会員がいるかもしれないが、これらは台湾人の悪口ではない。ありのままを書いているだけである）。

もっとも、こういった話をしたとしても、はたして学生が台湾にどれくらい関心を抱いてくれているかは定かではない。筆者としては、他の国、とりわけ、近くにあり、法整備をする際には日本の法制度を参考にしている台湾にも関心を持ってもらいたいと考え、授業で台湾に触れている。台湾や他の国の話をとおして、働き方、社会保障制度や家族のあり方について、日本の現状や法制度をある程度突き放して見てほしいと願っているからである。はたして、その試みがうまくいっているかは学生の評価にゆだねるほかない。

台湾を教えることの難しさ

鶴園裕基（香川大学）

執筆者は2022年度より、所属大学で「国際関係論」という講義科目を担当している。また2019-21年にかけては、首都圏の大学で「中国語圏の歴史と文化」、「異文化間コミュニケーション」という講義科目を非常勤で担当していた。いずれの授業も、東アジア国際関係史のなかに台湾を位置付けたりであるとか、あるいは他の中国語圏（華僑、香港、上海）の歴史と並行して台湾の歴史を解説するといった形をとった。そのため台湾について説明する時間は相対的に限られるものの、コメントペーパーからは受講生の台湾に対する高い関心が窺えた。以下では科目ごとに学生の反応や、教える際の要点・難点について簡単に述べたい。

まず「国際関係論」では、東アジア冷戦史の文脈に位置付けて WW2 後の国共内戦、中台対立、台湾の民主化といった一連の流れを説明した。この授業では、とくに主権問題や国際承認との関係の中で理解してもらうのが難しいと感じた。そのため国際規範化した民族自決原則と、世界的な趨勢としての脱植民地化の説明を前提としつつ、台湾事例における「脱植民地化の代行」という個別的な性質を補足して解説する必要があった。また高校で使った歴史教科書に台湾に関する記述がほとんどないことから、受講生にとっては理解の手がかりが少ない様子であった。台湾の政治史に関する簡明・包括的な一般書があれば、と思う所以である。なお本授業の最終回では、台湾をめぐる現在の国際関係についても解説した。

昨年度まで担当していた二科目は、どちらも 90 分 3-4 回分程度を台湾についての説明に割いていた。植民地期からの大まかな流れは周婉窈『増補版 図説 台湾の歴史』（平凡社、2013）に依拠し、戦後部分については執筆者の研究内容も多少加えて解説した。こちらはある程度の尺をとって説明するぶん、台湾が固有の歴史的経験を積み重ね、独自のアイデンティティを持つ主体であるということが理解された感触はあった。どちらの授業でもよく見られた質問は、「台湾は（なぜ韓国・中国などと違って）親日なのか」であった。これについては、「親日」「反日」という観点は、日本の側から近隣国をまなざす際に生まれるものであって、彼ら自身がどう考えているのかはまた別問題だと回答した。定番のクリシェをひとまず脇に置き、アイデンティティについて考えてもらうことを意図したが、十分理解されたかは定かではない。オンラインで実施した当該二科目では、ブレイクアウトルーム機能を使い、三泊四日のスタディトリップの計画を立てさせるグループワークを実施した。外出自粛期間中であつたためか、熱のこもった計画を立てるグループが少なくなかった。なお、参考資料として受講生に周知した、SNET 台湾の「みんなの修学旅行ナビ」は大変有用であつたようだ。

次年度以降は本務校において「東アジア政治論」、「政治学 A」という科目を新たに担当し、いずれの科目でも台湾の歴史を紹介する予定である。他の執筆者の体験談も今後の授業計画の参考としたいと考えている。

授業の枕のための一工夫：柯慶明先生の「台湾現代詩」講義から学んだこと

趙偵宇（南山大学）

あれは確か、2013 年のことだった。四百人以上をも収容可能な大教室で、私は七人もいる TA のうちの一人であつた。学生は教室の外に溢れるほどの大盛況であつた。台湾大学のオープンコースウェア (<http://ocw.aca.ntu.edu.tw/ntu-ocw/ocw/cou/101S203/1>) のおかげで、いまになっても容易にあの時期の情景を正確に書き綴ることができるが、授業映像が残されていないくても、十年経ったいまでもいくつかのことを鮮明に覚えている。

恩師の柯慶明先生（1946-2019）の「台湾現代詩」講義は、授業の枕、すなわち授業を進める前の出だしが少し変わっていた。初回の授業で、陳子昂「幽州台に登る歌」及び李白「静夜思」の解説を行った。当時の私は先生のこのやり方を理解できなかった。なぜなら、この二首の詩は、誰もが読んだことのある、わざわざ大学の授業で説明するはずもない名作であり、そして何より不思議だったのは、「台湾」でもなく「現代」でもないからだ。ちなみに、先生が指定した教科書は、先生の恩師である齊邦媛（1924-）先生が編んだ『中国現代文学選集（詩）』（爾雅出版社）である。書名は「中国」だが、実は「台湾」を指しているよ、と先生が説明されたことも印象に残った。

その年から担当し始めた「近現代の日中関係」（名城大学）では、「日中」関係の授業であるものの、私はいつも初回の講義で授業名と関係のないように見える「台湾」の話をしている。台湾のパスポートを見せて、その表紙にある、学生たちにとって馴染みのない「中華民国」という表記の由来を語り、台湾と「中国」との葛藤から、次第に日中関係の内容へとシフトしていく。台湾現代詩にとって、中国古典詩は決して無関係なものではないというように、近現代の日中関係について語るとき、台湾も勿論無視することができない存在である。いまはとくに学生的身分ではなくなったが、これからもずっと柯先生からいろいろ教えていただくことになるだろう。

17

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

第 155 回日本台湾学会定例研究会活動内容（※）

日時：2023 年 1 月 12 日（木）18 時 15 分～19 時 45 分

報告題目：「台湾統一地方選挙後の米中台関係の展望」

場所：早稲田大学 3 号館 306 教室

報告：李大中（淡江大学国際事務与戦略研究所准教授）

討論：伊藤剛（明治大学）

司会：平川幸子（早稲田大学台湾研究所）

主催：早稲田大学台湾研究所

参加人数：22 名

活動報告：

2022 年 11 月 26 日に実施された台湾統一地方選挙において、与党・民進党が大敗し、その責任を負った蔡英文総統が党主席を辞任するなか、2024 年に予定される総統選挙を睨んで、これからの中台関係の展開に対して国際的な関心が高まりつつある。本報告は、このような台湾情勢に基づき、今後の中台関係について、①：2022 年統一地方選挙の結果、②：第 4 次台湾海峡危機後の軍事的ニューノーマル(the new military normal)、③：中国共産党第 20 回党大会閉幕後の習近平政権の対台湾政策、④：米中の長期戦略的競争という四つの角度から分析し、展望を示した。

李大中氏は、選挙結果について、第一に台湾の統一地方選挙は 2024 年に予定される総統選挙に対するインジケータである点を指摘し、まだ変数は存在するものの、統一地方選挙の結果が総統選挙での勝利を目指す国民党にとって良い兆候であること、与党・民進党の政権維持にとっては警告であると論じた。第 4 次台湾海峡危機後も高まりつつある中国の台湾に対する軍事的圧迫については、これが兩岸において軍事的ニューノーマルを生み出したと分析、圧力は高まりつつあるものの、直接的侵略の予兆ではないと論じた。また、中国共産党第 20 回党大会への習近平主席の活動報告の分析を通じ、中国共産党の戦略を論じた。中台関係は依然としてアジア太平洋地域で最も危険性が高い課題であるが、すぐさま台湾海峡において中台の武力衝突が発生する可能性は低いと論じた。最後に、今後の中台関係を展望する上で最重要課題となる米中の長期戦略的競争を取り上げ、台湾が取るべき兩岸関係へのアプローチとして 2D(deterrence + dialogue)を示した。

討論者である伊藤剛氏からは、米中の台湾海峡をめぐる戦略の狭間で台湾がいかに自立性を保つことができるかという質問が寄せられ、米中両大国に翻弄される台湾の現状とその認識について、更に深い議論が行われた。（記録者：李承珉）

※定例研究会の開催回数表示について、事前の告知などでは第156回としたが、この開催報告では開催日に揃えて第155回と修正する。

第156回日本台湾学会定例研究会活動内容（※）

日時：2023年1月13日（金）17時30分～20時

報告題目：「台湾統一地方選挙研究の分析」

場所：早稲田大学3号館405教室

報告：小笠原欣幸（東京外国語大学）

討論：川上桃子（アジア経済研究所）、福田円（法政大学）

司会：若林正丈（早稲田大学台湾研究所）

主催：早稲田大学台湾研究所

参加人数：150名

活動報告：

2022年11月26日に実施された台湾における統一地方選挙は、兩岸関係の緊張が伝えられる中、2024年に実施される総統選挙の行方を左右するものとして、台湾だけでなく、日本を含む東アジア、欧米社会から注目を集めている。本報告では、第一部において台湾統一地方選挙の結果について、第二部では統一地方選挙の結果を踏まえ2024年総統選挙および中台関係の今後の展望について分析を行った。

第一部では、報告者の小笠原氏が、台北市、桃園市、新竹市、台南市など注目県市の事例を挙げ、現地調査や世論調査の分析を通じて民進党大敗・国民党大勝の背景を論じた。民進党が敗北へ至った具体的な要因は、候補者擁立の失敗、民進党政権長期化に対して有権者が抱く倦怠感、強引で稚拙な選挙戦術に対する反感、民進党が打ち出したスローガン「抗中保台」が功を奏さないなど、複数の要素が絡み合って生じたと分析した。それに対して、国民党の勝因は、国民党首長の県市の施政満足度が比較的高い点や、生活課題やワクチン政策に対する不満を蔡英文政権に対する批判と結びつけるという選挙戦術や中台関係の非争点化の成功などによるものと分析した。上記の分析をもとに、今回の選挙においてもこれまでの台湾の各種選挙において認められてきた、政権与党に対する牽制投票という有権者のバランス感覚が今回も作用したと指摘した。討論者の川上氏は、経済的要因と新竹市発の波及インパクトから、選挙結果への評価および次回総統選挙での民進党の挽回の可能性について質問を提起した。

第二部で報告者は、統一地方選挙の結果を踏まえ、2024年の総統選挙とそれに対応する中国の今後の展望を論じた。過去の総統選挙と地方選挙の結果を政権与党への牽制という視点を踏まえれば、与野党交互に勝利を収める「振り子」理論に沿っており、国民党が今回の地方選挙で勝利を収めたとはいえ、そのまま総統選挙での政権交代につながるわけではないと指摘した。その一方で、敗北した民進党・蔡英文総統による反省や総括が不十分な状態で、有権者に対して反省の姿勢をうまく示せていないという現状が今後の総統選挙の趨勢に影響を与える可能性が示唆された。そのうえで、総統選挙の勝敗を決める二つの要素である「台湾のあり方」および「中台・米台関係」に着目し、民進党、国民党、台湾民衆党各党の有力候補者の立場や狙い、世論への対応と課題について指摘した。討論者の福田氏は、中国の対台湾工作と政策、そして米中台関係という観点から総統選挙と中台関係の展望を論じた。福田氏によれば、習近平が胡錦濤政権期の対台湾工作に対して否定的評価を行ったことから、中国の対台湾工作のモデルは「代理人（団体）」に経済的利益を供与することを通じて台湾の選挙政治へ影響力を及ぼそうとするものへと転換した。また、昨年中国政府が発表した「白書」や総合的方針などに基づき、三期目に入った習近平の長期的な対台湾政策は「統一促進」を継続するものとなる可能性が高いことを指摘した。加え

て、台湾総統選挙に米中関係が与える影響に関して、影響は大きいものの、単に米中のような大国の影響によって選挙結果が決まるわけではなく、国際政治の大きな構図と台湾選挙政治が国際関係に与える影響の双方を観察していく必要がある点を強調した。最後に、フロアからは、民進党の動向、地方政治におけるパトロン・クライアント関係の変化、日台関係の今後、ウクライナ戦争の影響などに関して質問がなされ、台湾の地方選挙と国際政治、国際関係との関連性が明らかとなった。（記録者：魏逸瑩）

※前回と同様、開催回数表示を修正する。

定例研究会 関西西部会研究大会

担当幹事代理：五十嵐真子（日本台湾学会）

2022年12月17日（土）13時より、大阪・梅田にある関西大学梅田キャンパス KANDAI Me Rise にて第20回関西西部会研究大会を開催した。今年も昨年同様に対面と Google Meet を併用した。また、20回記念大会であるため、記念講演も行った。内容は以下のとおりである。

・第20回大会記念講演

「台湾史研究会の活動をふりかえって—台湾史研究会会報創刊号～現代台湾研究 52号を中心に—」

講演者：兵庫教育大学名誉教授・台湾史研究会前会長 松田吉郎

・研究報告

第1報告「戦後台湾における徴兵儀礼と台湾人の身体的戦争記憶」

陳志剛（京都大学大学院） 評論：小野純子（金城学院大学）

第2報告「台湾人民族運動家「楊肇嘉」のアーカイブから見た「立憲主義」」

野口真広（早稲田大学東アジア国際関係研究所） 評論：若松大祐（常葉大学）

第3報告「帝国日本の海運と台湾社会：大阪商船と日本郵船、辰馬汽船への目線」

松葉 隼（早稲田大学台湾研究所） 評論：井上敏孝（常磐会学園大学）

第4報告「台湾におけるデジタル防疫と個人情報保護」

上拂耕生（熊本県立大学） 評論：根岸忠（高知県立大学）

第5報告「YouTube から考えるアートと美術鑑賞～臺北市立美術館を例に～」

藤田千彩 評論：佐藤美弥（名古屋市立大学）

まず、記念講演では松田吉郎先生より前会長であり、また1977年の創設時より関わってこられたお立場から、台湾史研究会創立までの経緯やその目的について述べられた。その後、研究会機関誌『現代台湾研究』のこれまでの目次を提示されながら、最新号にいたるまでの研究成果や動向を説明された。最新刊52号に至るまで、多彩な分野の論文が掲載されたこと、実証研究・問題提起が継続していること、そして何より研究への熱意があることを強調された。最後に課題として、日本だけでなく、世界と広く交流することが望まれると締めくくられた。講演と質疑応答において、台湾史研究会が発足した当時は現在とは比較できないくらい台湾への関

心は低く、その中で研究活動を培ってきたことの重要性を改めて考えることとなり、今後の継続と発展にむけて努力を続けていきたいと強く感じた。

続いて行われた研究報告であるが、今回は5つのそれぞれ異なる分野からの発表となった。途中、資料共有や音声などのトラブルもあったが、概ねプログラムどおりに進行した。

第1報告は、1950年代の徴兵された兵士の入営式（徴兵儀礼）では、中華民国政府の思惑に反して、日本統治下の記憶を呼び覚まし、軍歌や送別式などが行われたことについて言及した。この状況を報告者は二つの戦争記憶（台湾人と中華民国政府）が競合しながら交錯し、影響を及ぼし合う時代であり、単に抑圧されただけの時期ではなかったと考察している。これに対して評論者の小野さんは1940年代と比較するなど、より日本統治時代を掘り下げて考察する必要があると指摘する。そして、「記憶」とは何なのかについての考察も必要であるとした。また、コメントの中で示された日本式とは異なる寄せ書きはさらなる議論の余地を示したと言える。

第2報告は富邦銀行に保存された蔵書とこれらへの書き込み等から、楊肇嘉の思想の変化を考察するものである。蔵書には留学していた早稲田大学や京都帝大の影響があり、また楊肇嘉ら台湾人留学生が植民地政策や立憲主義を深く研究しており、世界的な立憲主義に大きな影響を受けていたことが示された。評論者の若松さんからは先行研究との違いや、そもそも「立憲主義」が報告のなかで何を想定しているのかといった点が不明確であるという指摘があった。立憲主義をどう考えるのか、についてはフロアからも質疑があった。

第3報告は内台航路をめぐる海運会社や総督府、台湾の有力者の交渉過程についてメディアを通して分析している。ここでは内地海運会社による運賃値上げや減便に対する台湾側の不満や強い対応をできない総督府への批判、独自の海運会社設立が困難な状況が詳細に示された。評論者の井上さんは、報告では1920年代が中心であったがそれ以降についての分析が必要であることや、先行研究との関連性や課題を示してほしいという指摘があった。

第4報告は、日本のメディア等で高く評価された台湾のデジタル技術を駆使した防疫体制について法学の立場から論じた。全民健康保険ICカードを用いた感染対策はプライバシー権・個人情報保護とは対立し、目的外適用となる。ただ、それに対する批判は国民からはなく、むしろ有効な対策として好意的に受け止められたとしている。むしろこれは「デジタル独裁主義」の中国に対する、「デジタル民主主義」という主張として考えられるのではないかと結論付けた。評論者の根岸さんは同じ法学の立場から、やはり法の目的外適用の問題についての指摘があり、自由や人権と国家のあり方の関係はどうなるのかと主張された。またフロアを交えて、実際の適用状況はどうであったのかについての議論も展開された。

第5報告は昨年の関西部会でも報告された藤田さんによる、台湾の現代アートをめぐる研究である。今回は台北市立美術館の活動、特にYoutubeを用いた情報発信とベネチアビエンナーレに焦点を当てた報告であった。コロナ禍におけるインターネットを用いた展示や作品に関する紹介が注目され、そこで「美術鑑賞」に異変が起こっているとされる。藤田さんはフィジカル/バーチャルという区分すら曖昧になるのではないかと分析した。本報告への評論者の佐藤さんは埼玉県立歴史と民俗の博物館での学芸員をされたこともあり、また、文化財保存やデジタル活用などについての専門である。コメントでは、美術鑑賞という概念が含む範囲は広く、また単に見るだけではない展示の試みはすでに行われたきたこと、Youtubeの利用はそこへどのような影響を与えるのか、という疑問点が挙げられた。藤田さんも報告で指摘していたように、台湾の各美術館の活動が台湾の文化政策全体とどのように関わっているのかが今後の研究の課題の一つであると思われる。

今回の参加者は会場25名、オンライン17名、計42名の盛況であった。討論時間を増やしたため、フロアやオンライン参加者からの意見を例年よりは議論に取り入れることが出来た。ま

た、人数を限定した形ではあったが懇親会も開催した。会場近くの「大東洋」にて17名が参加した。コロナ禍にて制限されていた会員間の交流の場を持てたことも今回の成果の一つであった。

離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録
許雪姬著／羽田朝子・殷晴・杉本史子訳／A5判616頁／税込8800円
台湾人でありながら「日本人」でもあった彼らは、何故「満洲国」へ渡ったのか、現地でどのような生活を送ったのか。オーラルヒストリーや資料を駆使して実態を描き出す。〔台湾学術文化研究叢書〕

孔子廟と儒教 学術と信仰
黄進興著作選集（二）
黄進興著／中純夫訳／A5判482頁／税込5500円
孔子の末裔たちの私的な孔子祭祀が国家の祭祀系統に組み込まれていく過程や、儒家の道統に対する歴代の価値基準などを分析し、儒教史・儒学史の変遷を映し出す。〔台湾学術文化研究叢書〕

孔子廟と帝国 国家権力と宗教
黄進興著作選集（二）
黄進興著／工藤卓司訳／A5判338頁／税込5500円
如何にして孔子廟が中華帝国の礼制に組み込まれていったのか、ひいては政治に取り込まれていったのかを、孔子廟を巡る様々な歴史的表象を丹念にたどりながら考察。〔台湾学術文化研究叢書〕

鄭清文とその時代
郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容
松崎寛子著／A5判304頁／税込5500円
日本統治期台湾や都市と地方の関係、環境問題を取り上げた作品を多く残した作家鄭清文の作品を緻密に分析する。

フォルモサに咲く花
陳耀昌著／下村作次郎訳／A5判440頁／税込2640円
一八六七年、台湾南端の沖合でアメリカ船が座礁し、一三名が原住民族に殺された。本書はこの「ローバー号事件」の顛末を、台湾原住民族を中心に、さまざまな視点から描く歴史大河小説である。

東方書店

ホームページ〈中国・本の情報館〉<https://www.toho-shoten.co.jp/>

* 価格税込

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 / 営業電話 03-3937-0300 / FAX.03-3937-0955



学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

【第12期常任理事会第5回会議議事録】（抄）

日時：2022年12月9日（金）13:00-17:30

場所：東京大学東洋文化研究所3F会議室＋オンライン（Zoom）

出席：赤松美和子、家永真幸、大東和重、上水流久彦、川上桃子、北波道子、菅野敦志、富田哲、福田円、松田康博、山崎直也（以上、常任理事）やまだあつし（第25回学術大会実行委員長）

欠席：洪郁如、松金公正 主宰 松田康博（理事長）書記 五十嵐隆幸（幹事）

【報告】

1. 理事長・事務局

(1) 松田理事長

特になし。

(2) 川上事務局担当理事

特になし。

2. 各業務担当

(1)川上総務担当理事

第13期理事選挙の準備状況および会員名簿の更新状況について報告がなされた。

(2)山崎会計財務担当理事

配付資料にもとづき、第12期常任理事会第4回会議(2022年7月15日)以降の主な支出について報告がなされた。

(3)福田広報担当理事

配付資料にもとづき、学会ホームページの運営状況、メーリングリスト登録状況等について報告がなされた。

(4)赤松ニュースレター担当理事

配付資料にもとづき、来春発行予定のニュースレターの編集状況について報告がなされた。

(5)松金編集委員長(代理報告:家永理事)

配付資料にもとづき、『日本台湾学会報』(第25号)の投稿、査読状況について報告がなされた。

(6)富田企画委員長

配付資料にもとづき、第25回学術大会の応募、審査状況について報告がなされた。

(7)菅野・洪国際交流担当理事

配付資料にもとづき、対外発信プロジェクト(優秀学会賞論文の英訳支援)のほか、IJTS誌掲載論文の優秀論文選出に関する取り組みについて報告がなされた。

3. その他 特になし。

【議題】

1. 第25回学術大会について

(1)分科会報告について(富田企画委員長)

分科会企画3本(うち2セッション企画1本)、自由論題13本の応募があった。プログラム案については、開催校との調整後、メール審議で決定する。

(2)会場校の準備状況等について(やまだ実行委員長)

配布資料にもとづき、学術大会の準備状況について報告がなされた。

2. 日本台湾学会倫理綱領の作成について(川上総務担当理事)

配布資料にもとづき、昨今の学会運営の趨勢に鑑み、倫理綱領制定の必要性が説明され、制定について審議が行われた。今期中の策定を目指して準備を進める。

3. 会費長期未納者の退会について(川上総務担当理事)

学会規約第5条にもとづき、4年以上会費未納の会員約70名の退会を承認した。

4. 会員の入退会について(川上総務担当理事)

入会申請2件、退会申請1件、シニア会員への移行1件が承認された。

5. その他 特になし。

以上

